退任なさる先生からのメッセージ

一語学教師の述懐

臼田　紘

振り返ってみると、五〇年もフランス語を学び、また教えもしてきたが、フランス語についてもフランス語で書かれた文学についても、今もって何も解っていないような気がする。わたしのフランス語理解は、あらためて告白するまでもないが、多分、これよりずっと短い年月を生きてきた若いフランス人にさえ及ぶものではない。その文化の中で生きていない場合、これを理解するのは容易ではないということを、この半世紀に及ぶ長い年月、身をもって体験し続けてきたように思われる。また、紙の上での理解、観念的な理解だけでは真の理解とはなりえないということも実感している。言語の場合、その言語を実際に用いながら感覚を磨いていくことが絶対的に必要に思われ、そのためには何としてもそれを用いる世界の中に身を置いていることが必要であろう。

現在では、フランスに長期滞在して、フランス人と同じようにその言語を自由に使える日本人が増えている。おそらく、かれらはフランス語の言語感覚をも身につけていることだろう。それはしばらく前には考えらないことだった。わたしがフランス語を学び始めた頃には、まだフランスに行ったことのないフランス語の先生も多かった。こうした先生方のフランス語理解の努力を想像すると、並大抵なものではなかったのではないかと思わざるをえな

い。そうした先生方は、多分日本にいてフランス語を学び、さらにはフランスの文学を読むことの限界を充分に知りながら、果敢に挑戦して、これを理解する努力を続けていたのだと思う。フランスとの往来も飛躍的に容易になり、情報も一瞬にして入手できる現在、そうした過去の困難は笑い話にされるところがあるかもしれない。フランス語を学ぶ者は、少なくとも自在にフランス語を話し、読み、書くことぐらいはできてあたりまえの時代になっている。

しかしそれでも、この言語は言うまでもなくよその国のものなのである。これを学ぶすべての人は「解らない」というところから出発する。そしてそれが少しずつ「解る」という方向を目指して進む。人によってその速度なり到達点は異なるだろうが、終わりに到着することはないのではなかろうか。ましてその言語で書かれた過去の文学であれば、現代を生きるフランス人にも理解困難な部分はあるだろうし、さらなる学問が必要であろう。

日本人であるわたしが、フランス人に伍してフランス語を理解しフランス文学を理解するのは無理であるにしても、それなら、かれらの立脚し得ない日本人という立場から、その文化を解らないながら理解しようと心がけることに徹する以外にないと覚悟を決めるべきであろう。昔の先生方にはその意識が強かったように思われる。

文化、とりわけその核となる言語は、わたしたち自身のそれを考えても、変転きわまりない。しばらくぶりでフランスに行くと、思わぬ単語が、「え！こんな風に使うの？」と思われるような使われ方をしていて、驚かされることがある。しかしフランス人にとっては、それは本来の使用方から少しも逸脱したものではない。言われてみれば解るにしても、そうしたときに、言語がまさに生きていることを実感させられるのである。

わたしは学生に、辞書でひとつの単語にたくさんの日本語訳が書いてあるのは、そこに文化のちがいが表れているからだと話す。その一語に包含される意味の広さは、見ただけでも異文化理解の困難を示している。しかもその日本語訳自体何かしら似て非なるものに思え、立ち止まってしまうことがある。これからも「解らない」とぼやきながら、少しでも「解る」ように努力していくしかない。ここまできてしまったのだから。

臼田　紘（うすだひろし）

生年月日（出生地）

一九四〇（昭和十五）年十二月三日（東京都新宿区若葉町）

学　歴

一九六四（昭和三九）年三月　早稲田大学第一文学部卒業
一九六九（昭和四四）年三月　早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了
一九七三（昭和四八）年三月　早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了（満期退学）

職　歴

一九六四（昭和三九）年四月　フランス政府東京日仏学院に就職（一九六七年八月退職）
一九六八（昭和四三）年八月　杉野女子大学非常勤講師に就任（一九七八年三月退任）
一九七二（昭和四七）年四月　跡見学園女子大学非常勤講師に就任（一九九〇年三月退任）
一九七五（昭和五〇）年四月　跡見学園短期大学専任講師に就任
一九七八（昭和五三）年四月　跡見学園短期大学助教授に昇任
一九八三（昭和五八）年十月　跡見学園短期大学教授に昇任
二〇〇三（平成十五）年四月　跡見学園女子大学文学部教授に就任

この間、武蔵野美術大学、大東文化大学、中央学院大学、早稲田大学文学部・社会科学部などの兼任講師を歴任

役職

一九九〇（平成二）年五月　跡見学園評議員に就任
一九九三（平成五）年五月　跡見学園理事に就任
一九九五（平成七）年四月　跡見学園短期大学部学長に就任
（二〇〇三年三月退任）
一九九九（平成十一）年九月　東京都私立短大協会理事に就任
（二〇〇三年五月退任）

所属学会

日本フランス語フランス文学会（一九六五年四月～）
日本フランス語教育学会（一九七一年四月～）
大学教育学会（二〇〇四年九月～）

主要著訳書

（共著）

『プリモ・フランス語文法』　朝日出版社（一九八一）
『フランス語レクチュール』　駿河台出版社（一九八三）
『フランス小説の現在』　高文堂出版社（一九八二）

（単著）

『概観フランス文学』　林泉書荘（二〇〇八）
『スタンダール氏との旅』　新評論（二〇〇七）
『スタンダールとは誰か』　新評論（二〇一一）
スタンダール『イタリア紀行』　新評論（一九九〇）
スタンダール『イタリア旅日記』（全二巻）
新評論（一九九一、九二）
スタンダール『ローマ散歩』（全二巻）
新評論（一九九六、二〇〇〇）

主要論文（単著）

「大学におけるフランス語教育」
大東文化大学『教養課程創立二〇周年記念論文集』（一九八八）
「De l'Amourにおける《体験》をめぐって」　早稲田大学大学院仏文専攻『フランス文学研究』第六号（一九七〇）
「De l'Amour小論」　杉野女子大学『紀要』第九号（一九七二）
「スタンダールにおけるロマン主義運動（一）」
杉野女子大学『紀要』十一号（一九七四）
「スタンダールにおけるロマン主義運動（二）」
杉野女子大学『紀要』十三号（一九七七）
「『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』小論」早稲田大学文学部『ヨーロッパ文学研究』第二一号（一九七三）
「『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（第三版）』小論」
跡見学園女子大学文学部『紀要』第三七号（二〇〇四）
「『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』のテクストをめぐって」
跡見学園女子大学文学部『紀要』第四六号、（二〇一一）
「『ローマ散歩』のテクストをめぐって」日本スタンダール研究会
慶応義塾大学出版会『スタンダール変幻』（二〇〇二）
「『ローマ散歩』のテクストをめぐって Ⅱ」
跡見学園女子大学短期大学部『紀要』第三〇号（二〇〇三）